

児童生徒の心に寄り添う AI 対話アプリ「MIRAI ノート」

取組のあらまし

- 取組団体 三田市教育委員会（兵庫県三田市）
- 取組内容 児童生徒への支援と自己表現力の育成等を目的に、生成 AI を活用した対話アプリ「MIRAI ノート」の導入に向けた研究や実証を実施。AI との安心・自由な対話を通じて、思いや悩みを表出する場の提供を目指している。
- 推進体制 8名（令和6年度）
- 予算等 13,500 千円（令和6年度）

1 兵庫県三田市の概要

人口	106,482 人	令和7年1月1日現在（住民基本台帳人口）
職員数	108 人	令和6年4月1日現在（教育部門）
総面積	210.32 km ²	令和7年10月1日現在（国土地理院「全国都道府県市区町村別面積調」）

図表 1 兵庫県三田市の位置図



出所：三田市ホームページ

2 取組の背景・目的

(1) 児童生徒の孤立感と対話不安における課題

三田市教育委員会において、AI 技術を活用した新たな教育支援の取組として、「MIRAI ノートプロジェクト」が実施されている。これは、三田市教育委員会と大阪教育大学の連携により令和6年度から始動したものであり、生成 AI を活用した対話アプリを通じて、児童生徒が安心して自分の思いや悩みを表現できる場を提供することを目的とするものである。

近年、子どもたちを取り巻く環境は大きく変化している。コロナ禍によって、人と人との直接的な交流機会が大幅に減少し、対話に対して不安を覚える児童生徒が増加している実情がある。また、不登校児童生徒の数も全国的に増加傾向にあり、三田市においても例外ではない。加えて、三田市が実施した生活アンケートの結果によれば、小学校高学年から中学生の約1割が「困ったときに誰にも相談しない」と回答しており、孤立のリスクが高いことがうかがえる。

思春期の子どもたちにとって、家庭や学校といった身近な環境においても、本音を打ち明けることに躊躇を感じることは珍しいことではなく、信頼関係の構築が不十分なまま悩みを抱え込んでしまうケースが少なくない。こうした背景を踏まえ、同市では「誰にも話せない思い」を受け止める新たな対話手段として、生成 AI による対話アプリの導入を模索し、具体化に至った。

このプロジェクトは、児童生徒が日常生活の中で、気軽に AI キャラクターと対話し、自らの感情を整理する機会を得るとともに、コミュニケーション能力を育成する場としての機能を期待されている。さらには、教員が把握しきれない児童生徒の心の動きを間接的に知るツールとしても有効であり、教育現場における支援体制の充実を図る狙いがある。

3 取組内容

(1) MIRAI ノートが実現する自由な対話

「MIRAI ノート」は、生成 AI の自然言語処理技術を活用して開発された児童生徒向けの対話アプリである。利用者は、アプリ内に登場する8人の個性豊かな AI キャラクターと会話を楽しむことができる。それぞれのキャラクターは、「自由を愛するお兄さん」「優しい保健の先生」「何にでも興味津々で元気な中学生」など、多様な人格特性を備えており、児童生徒は自身の気分や話題に応じて対話相手を選択することができる。

図表 2 AI キャラクターのプロフィール



出所：三田市教育委員会・大阪教育大学プレスリリース資料「【全国初】教育機関が主体となり開発した AI 対話アプリ「MIRAI ノート」が完成！～AI を活用し、何でも話せるコミュニケーションの場を創出～」

アプリには、主に2つの機能が備わっている。ひとつは、「今日のふりかえり」と呼ばれるもので、学校で使用することを想定している。利用者は、その日の気分を選択肢から選び、加えて、自由記述により感想や出来事を記入する。AI はその内容を解析し、もうひとつの機能「AI トーク！」利用時に、ふさわしいキャラクターを提示する仕組みとなっている。

「AI トーク！」は、主に家庭での使用が想定されており、学校生活のこと、自分の趣味、自慢話、さらには、他人には話しにくい悩みまで、自由に話すことができる。AI キャラクターは、それぞれが異なる観点から返答を行い、ユーザーの話を受け止める対話相手として機能する。ここで重要なのは、AI が「評価しない」・「否定しない」存在であることであり、子どもたちは安心して言葉を発することができるのである。

図表 3 AI トークのイメージ画像



出所：三田市教育委員会提供

令和7年1月9日から22日にかけて、三田市内のゆりのき台中学校、すずかけ台小学校、そして、市内教育支援センター「三田市あすなろ教室」において、約350人の児童生徒を対象とした実証実験が行われた。この中では、教師が児童生徒の入力内容を個別に閲覧せず、あくまで、AIとのやりとりを通じて心の整理や表現力を育むことを重視した運用がなされた。

4 成果・課題

(1) 本取組の成果

三田市の「MIRAIノート」導入は、AI技術を用いた教育支援の可能性を示す先駆的な取組であり、今後の地方自治体における施策展開のモデルとなり得る。

実証実験の結果、参加者の72%が「MIRAIノート」を通じて、「自分の思いを整理することができる」と回答し、70%が「ふだん言えないことでも言えるようになることがある」と感じたことが分かった。さらに、普段話しにくい悩みをAIに話すことができたという声もあり、自己開示を促進する効果が確認された。これにより、児童生徒の心理的サポートやコミュニケーション能力の向上が期待される。

加えて、アプリを通じて収集される記述データを分析することで、児童生徒の心理的傾向や、学校生活における潜在的な課題の把握にもつながる可能性がある。たとえば、継続的に「悲しい」・「しんどい」といった気分を記録する児童生徒については、学校側が早期に気づき、支援に結びつける体制構築が期待される。

(2) 課題と今後の展望

一方で、課題も浮き彫りとなった。まず、AIとの対話に慣れていない児童生徒にとっては、会話の自然さや内容の的確さに疑問を感じる場面も見られた。また、AIの返答が一部、定型的になりがちで、個別の事情に十分対応できないケースがあったことから、応答の精度と多様性の向上が必要である。

さらに、保護者や教員の理解と、協力体制の構築も課題のひとつである。AIとの対話が現実の人間関係の代替とはなり得ないことを踏まえ、アプリの使用が子どもの発達にどのような影響を及ぼすか、長期的な視点で評価する必要がある。

「MIRAIノートプロジェクト」は、教育現場における生成AIの活用可能性を示す好例である。今後は、AIキャラクターの応答の質をさらに向上させるとともに、児童生徒の興味関心や発達段階に応じたカスタマイズ性を高めることが求められる。

また、アプリの導入効果を最大化するためには、教員やスクールカウンセラーとの連携を強化し、AIで得られた知見をリアルな教育支援へと還元する仕組みづくりが不可欠である。加えて、保護者を対象とした説明会や体験機会の提供など、家庭と学校との連携を強める取組も重要である。

最終的には、こうした技術が「孤立を防ぐセーフティネット」として機能し、すべての子どもたちが安心して自己表現できる社会の構築につながることを期待される。

関連・参考資料

三田市ホームページ「AI 対話アプリ「MIRAI ノート」を活用した「MIRAI ノートプロジェクト」

<https://www.city.sanda.lg.jp/soshiki/65/taisetsu/seitoshidou/MIRAInote/30902.html>

三田市ホームページ「MIRAI ノートの使い方」

<https://www.city.sanda.lg.jp/material/files/group/66/tukaikata.pdf>

三田市ホームページ「MIRAI ノートで未来体験！～協力のお願ひ～」

<https://www.city.sanda.lg.jp/material/files/group/66/miraitaikenn.pdf>

三田市教育委員会・大阪教育大学プレスリリース資料「【全国初】教育機関が主体となり開発した AI 対話アプリ「MIRAI ノート」が完成！～AI を活用し、何でも話せるコミュニケーションの場を創出～」

<https://www.city.sanda.lg.jp/material/files/group/66/20250109pressrelease01.pdf>